

二八 袴垂合保昌事「宇治拾遺物語卷二・一〇」

昔、袴垂はかまだれとていみじき盗人の大將軍ありけり。十月ばかりに衣きぬの用ありければ、衣少

しまうけん意志む終止・音便とて、さるべき所々窺ひ歩きけるに、夜中ばかりに人皆しづまり果てて後、月

の朧形容動詞おぼろなり連体なるに、衣あまた着たりけるぬしの、差貫のそば狭ばみてきぬの狩衣めきたる着

て、ただ一人笛吹きて行きもやらで助詞打消し練り行けば、「あはれ、これこそ我に衣得させんとて出

でたる人なめり断定なり連体―接続は終止形&アル」と思ひて、走りかかりて衣を剥がんと思ふに、あやしく物の恐ろしく

覚えければ、添ひて二三町ばかり行けども、我に人こそ付きたれと思ひたる気色もなし。いよ

いよ笛を吹きて行けば、試みんと思ひて、足を高くして走り寄りたるに、笛を吹きながら見かへ

りたる気色、取りかかるべくも覚えざりければ、走り退きぬ。完了ぬ終止

かやうにあまたたび、とぎまかやうざまにするに、露ばかりも騒ぎたる気色なし。「希有の人

かな」と思ひて、十余町ばかり具して行く。「さりさ+あり(そのまま)とてあらんやは」と思ひて刀を抜きて走

りかかりたる時に、その度笛を吹きやみて立ち返りて、「こは何者ぞ」と問ふに、心も失せて、

吾にもあらでついゐられぬ。また、「いかなる者ぞ」と問へば、「今は逃ぐともよも逃が

さじ打消推量し終止」と覚えければ、「引剥ぎに候ふ」といへば、「何者ぞ」と問へば、「字袴垂あざなとなんいは

れ候ふ」と答ふれば、「さいふ者ありと聞くぞ。危げに希有のやつかな」といひて、「ともに

まうで来」とばかりいひかけて、また同じやうに笛吹きて行く。この人の気色、「今は逃ぐとも

よも逃さじ」と覚えければ、鬼に神取られたるやうにて共に行く程に、家に行き着きぬ。いづこ

ぞと思へば、撰津前司保昌といふ人なりけり。家の内に呼び入れて、綿厚き衣一つ賜りて、「衣

の用あらん時は参りて申せ。心も知らざらん人に取りかかりて、汝過ちすな」とありしこそあ

さましく、むくつけく、恐ろしかりしか。いみじかりし人の有様なり。捕へられて後語りけ

る。